

学位論文審査の要旨

	倉田 芳弥 【比較社会文化学専攻 平成15年度生 平成30年度再入学】	要 旨
学位申請者		<p>本論文は、近年急速に利用者の増加している文字による会話である LINE 会話に見られる相づちの特徴を、日本語母語場面、韓国語母語場面、日韓接触場面という3つの場面における LINE 会話の相づちの分析をとおして明らかにすることを目的とする。</p> <p>本論文は、4つの研究から構成される。音声会話の多くの研究の分析の観点に依拠し、研究1では相づちの頻度について、研究2では相づちの表現形式について、研究3では相づちの機能について、研究4では相づちの送信方法について、それぞれ上記3場面について分析を行った。</p> <p>その結果、音声会話と同様、LINE の会話という文字を介した会話においても、日本語母語場面の相づちには共話的な特徴、韓国語母語場面には対話的な特徴が見られた。また、日韓接触場面においても、母語場面で見られた共話、対話という日本語母語場面、韓国語母語場面それぞれの会話のスタイルが維持され、また日本語母語話者と韓国語母語話者双方の調整が見られるなど、音声会話に類似した相づちの特徴が指摘された。一方で、相づちを単独で送信するか、あるいは相づちに実質的な発話を続けて送信するかなど、相づちの送信方法によって発話の宛先を区別するなど、送信システムに制約のある LINE 会話独自の相づちの特徴も明らかにされた。</p> <p>音声会話においては、聞き手の反応の一つである相づちの重要性が指摘されているが、打ち言葉と呼ばれる文字による会話である LINE 会話における相づちについての研究は緒についたばかりであり、第1回審査委員会では、今後の相づち研究及びコミュニケーション研究への示唆に富む研究であると高く評価された。しかし、依拠する理論に関する記述が不十分であること、韓国語の翻訳に修正すべき点があること、分かりにくい表現があることなどが、改善すべき事項として指摘された。申請者がこれらの要求に十分に答えた修正版を作成したことを確認した後、最終審査に進むことを決定した。</p> <p>公開発表会では重要な点を簡潔にまとめた分かりやすい発表が行われ、参加者や審査委員の質問にも真摯な姿勢で的確な応答が見られた。以上によって審査委員会は、博士(人文科学)(Ph. D. in Applied Linguistics)の学位授与に相当すると判断し、合格とした。</p>
論文題目	LINE の会話における相づちの研究 —日韓母語場面と日韓接触場面との比較から—	
審査委員	(主査) 教授 佐々木 泰子	
	教授 森山 新	
	准教授 伊藤 さとみ	
	講師 加納 なおみ	
	准教授 山本 綾 (昭和女子大学国際学部)	
インターネット 公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否 (可 ・ 否)</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <p style="margin-left: 20px;">ア. 当該論文に立体形状による表現を含む</p> <p style="margin-left: 20px;">イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</p> <p style="margin-left: 20px;">ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている</p> <p style="margin-left: 20px;">エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、 もしくは予定されている</p> <p style="margin-left: 20px;">オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</p> <p>※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	